

野ばら

小川未明

青空文庫

おお 大きな国くにと、それよりはすこし小さな国くにとが隣となり合あつていまし
 た。当座とうざ、その二つの国くにの間あいだには、なにごとも起おこらず平和へいわであ
 りました。

ここは都みやこから遠とおい、国境こつきようであります。そこには両方りようほうの
 国くにから、ただ一人ひとりずつの兵隊へいたいが派遣はけんされて、国境こつきようを定めさだめ
 た石碑せきひを守まもつていました。大きな国くにの兵士へいしは老人ろうじんでありました。
 そうして、小さな国くにの兵士へいしは青年せいねんでありました。

ふたり 二人は、石碑せきひの建たつている右みぎと左ひだりに番ばんをしていました。いたつ
 てさびしい山やまでありました。そして、まれにしかその辺へんを旅たびする
 人影ひとかげは見みられなかつたのです。

初め、たがいに顔を知り合合わない間は、二人は敵か味方かというような感じがして、ろくろくものもいいませんでしたけれど、いつしか二人は仲よしになってしまいました。二人は、ほかに話をする相手もなく退屈であつたからであります。そして、春の日は長く、うららかに、頭の上に照り輝いているからであります。

ちようど、国境のところには、だれが植えたということもなく、一株の野ばらがしげっていました。その花には、朝早くからみつばちが飛んできて集まっていました。その快い羽音が、まだ二人の眠っているうちから、夢心地に耳に聞こえました。「どれ、もう起きようか。あんなにみつばちがきている。」と、

ふたりは申し合わせたように起きました。そして外へ出ると、はたして、太陽は木のこずえの上に元氣よく輝いていました。

二人は、岩間からわき出る清水で口をすすぎ、顔を洗いにまいますと、顔を合わせました。

「やあ、おはよう。いい天気でございませぬ。」

「ほんとうにいい天気です。天気がいいと、気持ちがせいせいします。」

二人は、そこでこんな立ち話をしました。たがいに、頭を上げて、あたりの景色をながめました。毎日見ている景色でも、新しい感じを見る度に心に与えるものです。

青年は最初将棋の歩み方を知りませんでした。けれど老

うじん
人について、それを教わりましてから、このごろはのどかな昼
ごろには、二人は毎日向かい合つて将棋を差していました。
はじめのうちは、老人のほうがずっと強くて、駒を落として差
していましたが、しまいにはあたりまえに差して、老人が負か
されることもありました。

この青年も、老人も、いたつていい人々でありました。

ふたり
二人とも正直で、しんせつでありました。二人はいつしやう

けんめいで、将棋盤の上で争つても、心は打ち解けていました。

「やあ、これは俺の負けかいな。こう逃げつづけでは苦しくてか

なわない。ほんとうの戦争だつたら、どんなだかしれん。」と、

老人はいつて、大きな口を開けて笑いました。

青年せいねんは、また勝ちかみがあるのでうれしそうな顔かおつきをして、
 いっしょうけんめいに目めを輝かがやかしながら、相手あいての王おうさまを追おつて
 いました。

小鳥ことりはこずえの上うえで、おもしろそうに唄うたっていました。白しろいば
 らの花はなからは、よい香かほりを送おくつてきました。

冬ふゆは、やはりその国くににもあつたのです。寒さむくなると老人ろうじんは、
 南みなみほうの方ほうを恋こいしがりました。

その方ほうには、せがれや、孫まごが住すんでいました。

「早くはや、暇ひまをもらつて帰かえりたいものだ。」と、老人ろうじんはいいまし
 た。

「あなたがお帰かえりになれば、知しらぬ人ひとがかわりにくるでしょう。

やはりしんせつな、やさしい人ならいいが、敵、味方というよう
な考えをもった人だと困ります。どうか、もうしばらくいてくだ
さい。そのうちには、春がきます。」と、青年はいいました。
やがて冬が去つて、また春となりました。ちようどそのころ、
この二つの国は、なにかの利益問題から、戦争を始めました。
そうしますと、これまで毎日、仲むつまじく、暮らしていた二
人は、敵、味方の間柄になつたのです。それがいかにも、不
思議なことに思われました。

「さあ、おまえさんと私は今日から敵どうしになつたのだ。私は
こんなに老いぼれていても少佐だから、私の首を持ってゆけば、
あなたは出世ができる。だから殺してください。」と、老人

はいいました。

これを聞くと、青年は、あきれた顔をして、

「なにをいわれますか。どうして私とあなたとが敵どうしでしょう。わたしてき私の敵は、ほかになければなりません。戦争はずっと北の方で開かれています。私は、そこへいつて戦います。」と、青年はいい残して、去ってしまいました。

国境には、ただ一人老人だけが残されました。青年のいなくなった日から、老人は、茫然として日を送りました。野ばらの花が咲いて、みつばちは、日が上がると、暮れるころまで群がっています。いま戦争は、ずっと遠くでしているので、たとえば耳を澄ましても、空をながめても、鉄砲の音も聞こえな

ければ、黒い煙の影すら見られなかつたのであります。老人は
その日から、青年の身の上を案じていました。日はこうしてた
ちました。

ある日のこと、そこを旅人が通りました。老人は戦争に
ついて、どうなったかとたずねました。すると、旅人は、小
な国が負けて、その国の兵士はみなごろしになつて、戦争は終
わつたということを告げました。

老人は、そんなら青年も死んだのではないかと思ひました。
そんなことを気にながら石碑の礎に腰をかけて、うつむいて
いますと、いつか知らず、うとうとと居眠りをしました。かなた
から、おおぜいの人のくるけはいがしました。見ると、一列の軍

隊うたいでありました。そして馬うまに乗のつてそれを指揮しきするのは、かの青年せいねんでありました。その軍隊ぐんたいはきわめて静せい肅しゆくで声こえひとつたてません。やがて老人ろうじんの前まえを通とおるときに、青年せいねんは黙もく礼れいをして、ばらの花はなをかいだのでありました。

老人ろうじんは、なにかものをいおうとする目めがさめました。それはまったく夢ゆめであつたのです。それから一ひと月つきばかりしますと、野のばらが枯かれてしまひました。その年としの秋あき、老人ろうじんは南みなみの方ほうへ暇ひまをもらつて歸かえりました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 2」講談社

1976（昭和51）年12月10日第1刷

1982（昭和57）年9月10日第7刷

※表題は底本では、「野《の》ばら」となっています。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：匿名

2012年5月22日作成

2012年9月28日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

野ばら

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>